



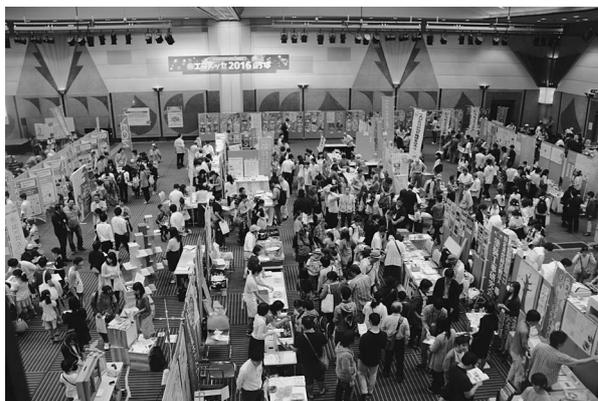
授業・研究から活動・事業へ

鹿児島大学の満塩勝先生からバトンを受け取りました千葉工業大学先進工学部教育センターの谷合哲行です。満塩先生とは分析化学会の本部 web 委員会で以前からお世話になっています。いつもは学会の Network 環境の整備や HP のコンテンツ更新、年会・討論会の登録システムの調整やプログラム校正などを一緒に担当させていただいています。各支部に HP の管理をしているネットワーク担当がいるのですが、この手の仕事は担当できる人が限られるので、私も満塩先生もそれぞれの支部のネットワークを下支えする形で本学会に関わらせていただいています。満塩先生は研究室も開いていらっしゃいますので、研究面でも学会に貢献されていますが、私の場合には所属の関係で卒研生を受け入れられるような研究室を開くことができませんので、研究分野で学会に貢献することが難しい状況が続いています。今回、リレーエッセイという形ではありますが、学会誌に原稿を寄稿できる機会をいただきましたので、私の活動の近況報告と、関東支部の若手の紹介をしたいと思ってお引き受けさせていただきました。

大学院博士課程までは日本大学理工学部にお世話になり 2001 年に学位を取得し、一年間の非常勤講師とポストドク期間を経て、2002 年から現職である千葉工業大学に赴任いたしました。ちょうど大学全入や大学教育の大衆化・ゆとり世代問題など、大学の初年次・導入教育が注目されていた時期にあたり、高校生までの“授業”から大学での“講義”に橋渡しするような教え方が求められていました。専門性が異なる複数の教員が関わるオムニバス形式での教養科目を開設・担当したり、スポーツを題材とする Project Based Learning 型の授業を実践したりと、教育分野での活動を積極的に行っていました。

細々と個人で続けてきた研究も、ようやく二つの特許という形で実を結ぼうとしています。研究室を持っていない状況で技術の優先権を確保するため、保有する技術を“特許化”しておいて、それを企業や団体と共有して事業に活用していくというスタイルを目指しています。特殊・固有な成分を有する多肉植物のカルス製造技術（特許 5636599）や揮発性有機化合物の気化分離抽出装置に関する特許（特許 5724144）で、興味を持ってくれる企業や団体があれば、協同して事業・研究を行いたいと思っています。

一方、学外では 2008 年度から千葉県最大の環境イベントであるエコメッセ in ちばに参加し、2012 年からは実行委員会の委員をさせていただいています（<http://www.ecomesse.com/>）。この関係で、県内各地の市民団体の活動を支援したり、いくつかの自治体の審議会の委員を拝命したりして活動範囲を拡大しています。支援先は市民団体から関連する企業・団体へと広がり、そのうちのいくつかの企業・団体とは共同で助成金・補助金などの申請を行い、採択・事業化されるものも出てきました。中でも千葉県内の関連団体や業界・行政の関係者など 70 人以上が参加された昨年（2016 年）のエコメッセ 2016 in ちばの千葉県と共同で実施した千葉県 3R 推進シンポジ



ウムでは、3R 活動を行う千葉県内の学生団体の活動を紹介したことで、校内美化や学内廃棄物のリサイクルに取り組む学生の活動が県単位で認められ、更に大きな取り組みへと発展していくきっかけ作りができたと感じています。

こうして、活動の中心が授業から事業へと展開してゆく中で、個人の興味関心で始めた研究や活動が参加・協力してくれる人が増えて団体を作り、更にそこに企業や行政が入ってきてより大きな活動へと広がって行く様子を目の当たりにしてきました。日々新しい人たちと会い、新しいテーマと向き合いながら、自分なりの解決方法を模索する中で、“分析化学”を学んでいたことの重要性を感じないことはありません。事態・現象の本質を見極めようとして、“これは何か”と考える“定性分析”的な考え方や、要因となる物質の量をはかり、“どのくらいなのか”と考える“定量分析”的な考え方は、授業をしていても、事業のことを考えていても、一般の市民の方々と一緒に活動をしていても、私の頭の中のどこかにあって、有力な判断基準になっています。

もし、自分が学生時代にこうした活動をされている方と一緒に研究ができれば、きっともっと幅広い視点で自分の研究に取り組むことができたいですし、分析化学という分野にもっとたくさんの若い世代が興味を持っていただけるのではないかと思います。今の私にはそうした場を提供することはできませんが、分析化学会関東支部には若手の会があり、多くの先生・学生が参加され、日々切磋琢磨しています（<http://www.jsac.jp/~kanto/>）。その中から、次号では南澤宏瑚さんにバトンをリレーしたいと思います。出身研究室の後輩にあたるとともに、これから学位を取って研究者としての歩みをスタートしようという若手研究者です。日本の学会全体の傾向だと思いますが、若手研究者の発掘と育成が急務になっています。学会という場で、自分たちの研究を発表していくこともそうですが、こうしたリレーエッセイを通じて、各地の若手研究者に活動紹介の場を提供できれば幸いです。

〔千葉工業大学先進工学部 谷合哲行〕